

の優秀な先達の歩みを見聞できたことは幸いであつた。

我々のこの二回の交流が、中国鉄鋼業の発展の、また日中友好の一助となり得ればと思ひ帰国した次第である。

る。

鉄鋼業という同じ職場で働いている両者の連帯感をしみじみと感じている今日比の頃である。

コラム

余談 工業化と工業がうける社会からの評価

中国から多くの客員研究員や留学生の方々が我国に來られるようになった。私のところにも二人の方が居られる。日常の四方山話をしている中で、話題が報酬や家計のことにも及ぶことがしばしばある。2~3DK相当の住居で東北地区の北辺に当たる場所で、光熱水費を入れても、日本円で1ヶ月800円払えばよいなどと聞くと全く夢のような話だなあと思ってしまう。食料も我国に比べると大分やすいようである。米などは価格が1桁違いそうである。しかし、工業製品は国際共通の値段かそれよりも高いようで、月収が我国のレベルと比較して10~20分の1であることを考えると、カメラ、電気洗濯機、自動車などは想像を絶する程高価なものであり、おそらく我国で会社に入りたてのサラリーマンがローンでも気楽に乗用車を買ったりすることには、我々が住居費の安さに呆然とするのと同様、彼らにとつておどろくべきことだろうと想像される。

思えば我々が学生のころ、最高級の35mmカメラが8~10万円していた。その頃、大学卒の初任給は1万円前後であつたから、一台のカメラでカメラ会社は10人位の新入社員の給料を払うことができた。しかし、今は、カメラの機能は大変進歩し、品質も確かなものになつたにもかかわらず、当時8~10万円クラスのカメラと同一イメージのカメラが、12~15万円程度になつていだけである。そして給料は当時の10倍になろうとしている。したがつて、カメラという工業製品の価値は当時の10分の1の下がり、会社は1台のカ

メラで辛うじて一人分の初任給をまかなうといつたことになつてい

る。鉄鋼業でもこの間、生産量は15~20倍に増大したが従業員はおそらく2倍にも達していない。したがつて単位生産量で養える従業員の数は、カメラの場合と同じで1桁減つたことになろう。だから高度成長といふことが起こらなかつたら、我々の国も月収のレベルも衣食住のコストも中国と同じで、工業製品は想像を絶する程高価なものであつたろうと思ふ。

高度成長のような急速な工業化は、市場の急速な拡大による需要の増大を技術の進歩に裏付けられた労働生産性の増大によりまかなうことにより可能であつたし、市場の急速な拡大は工業製品の価格上昇に比し1桁上に近い上昇を示した収入によつて可能となつた。

したがつて労働生産性を技術により容易に高められない分野、例えば技術の可能性と安全性とが常にはかりにかけられる交通機関、同一面積からの収量に限りのある農業などは、労働コストの上昇を補うため必然的に政府の介入による経済的テコ入れや兼業化を必要として、それが3K赤字のうちの2Kの構造的あるいは本質的要因となつてい

るのだからと思ふ。このように工業は我々の経済生活を拡大し工業製品の便利さなどを容易に享受できるようにした。しかし、工業に直接従事する人間の数を減して來た。つまり工業で養う人間の比率は工業製品の価格が相対的に低落することにより減少した。そしてもしかすると、工業が人をだんだん必要としなくなるにつれて、社会の中で工業を評価する人間も減るのではないかと杞憂している。(東京大学工学部 木原諄二)